

國學院大學学術情報リポジトリ

『国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」 The Japanese and the Realm of the Unseen 報告書』の刊行

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000616

『国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」 The Japanese and the Realm of the Unseen 報告書』の刊行

本書は、2020年12月に國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所の主催で開催された国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」の基調講演、ワークショップ「見えざるものをエガク」、「見えざるものをカタル」における議論をまとめたものである。

開催概要は既に本誌第14号トピック1・2（8～11頁）にて紹介されているため、ここでは報告書の構成に焦点を絞って示す。

URL：<https://www.kokugakuin.ac.jp/research/oard/ijcc/ijcc-publications/forum-jru2020>



ワークショップ1「見えざるものをエガク」
「勸化本における地獄極楽と現世—『孝子善之丞感得伝』を中心に—」

遠藤美織（江戸東京博物館）9～20頁
「浮世絵に描かれた〈見えざるもの〉—「羅生門」の図様の展開を中心に—」

渡邊晃（太田記念美術館）21～26頁

ワークショップ2「見えざるものをカタル」

「非人間の／による認識の存在論的造作」

廣田龍平（東洋大学）29～33頁
「雪、妖怪、ゆるキャラ—北越雪譜と越後のアイデンティティについて—」

ドリュー・リチャードソン Drew Richardson



報告書表紙

（カリフォルニア大学サンタ・クルーズ校、
國學院大學国際招聘研究員） 35～41頁

“Supernatural Snow Stories: Some Notes on
Suzuki Bokushi’s Hokuetsu Seppu and
Regional Identity in Echigo”

Drew Richardson（カリフォルニア大学サンタ・クルーズ校、國學院大學国際招聘研究員） 43～49頁

※英語圏の読者の便を考慮して、基本的に日本語版と同内容の英語版の要旨を収録している。

国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」基調講演

「湯殿山信仰のモノ文化における不可視性と秘匿性」

アンドレア・カスティリオーニ Andrea

Castiglioni（名古屋市立大学講師） 53～58頁

「ラフカディオ・ハーンと〈見えざるもの〉の交渉をめぐる」

小泉凡（小泉八雲記念館館長、島根県立大学短期大学部名誉教授） 59～69頁

「陰陽師からいざなぎ流へ―見えるものから〈見えざる世界〉を探る技法―」

斎藤英喜（佛教大学教授） 71～79頁

※報告者の所属は本書刊行当時のもの

本書の編集は、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所のメンバーが行った。また、ワークショップ2ではドリュー・リチャードソン氏に日本語で報告してもらったが、本報告書に掲載する日本語版の発表要旨を作成するに際して、日本文化研究所の研究員である大場あや氏にご助力頂いた。

2019年の年末頃から影を落とし始めた新型コロナウイルス感染症（COVID-19）という新しい「見えざるもの」によって、われわれの生活は大きく翻弄されてきた。ウイルスを含む見えざるものと関わってきた歴史の中で、日本では、そうした見えざるものを神と呼び、また幽霊、妖怪、鬼といったさまざまな形で表現し、その交流の物語を作り出し、描き出してきたのである。

そうした「見えざるものたちと日本人」をテーマにしたのが本研究フォーラムであり、二つのワークショップ（ワークショップ1「見えざるものをエガク」・ワークショップ2「見えざるものをカタル」）と、基調講演となる国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」を、一連の企画として、いずれもZoomによるオンラインで開催した。

ワークショップ1「見えざるものをエガク」では、感化本の『孝子善之丞感得伝』にみる

異界表現、浮世絵の「羅生門」にみる鬼などの図像的展開を中心として、それぞれ美術史の立場から見えざるものについて論じている。

ワークショップ2「見えざるものをカタル」では、心霊動画などのカメラなどを用いた先端技術、『北越雪譜』にみる雪国と結びついた超自然の物語について、主に民俗学の立場から見えざるものについて論じている。

国際研究フォーラム「見えざるものと日本人」基調講演は、湯殿山信仰を例とする不可視性・秘匿性の働き、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が観察して海外へ発信した見えざるものの文化、陰陽師と「いざなぎ流」が見えざるものを顕現させる呪法や技法という広い視点から議論したものである。

本国際研究フォーラムが開催された2020年から2022年現在まで、われわれは試行錯誤を繰り返しながら、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）と付き合ってきた。

本報告書の刊行により、見えざるものと日本人についての文化的な理解を一層深めて、見えざるものを取り巻く種々の問題について考えるきっかけとなることを期待したい。

（川嶋麗華）